Japan Society of Obstetrics and Gynecology

259　卵巣がんにおける不可視病巣の検出とその意義に関する研究

長崎大
中島久良，村上俊雄，荒木文明，熊谷淳二，
福居兼実，行徳　豊，石丸忠之，山辺　徹

〔目的〕卵巣がんの予後不良な要因のひとつに，不可視病巣の看過(不適切なstaging)が挙げられる。そこで，術中の細胞診および摘出材料の組織診により，不可視病巣の検出頻度とその局在を明らかにして，正確なstagingに基づく治療法の選択と予後の推定を行う。〔方法〕卵巣がん16例に対し，開腹直後，ダグラス窩，上行と下行結腸間膜外側および横隔膜下の順に擦過ないし洗浄細胞診を行い，ついで腹腔全体の洗浄細胞診を施行した(staging cytology)。また，開腹時診断Ia期29例の対側卵巣(肉眼的にintact)におけるがんの潜伏およびⅠ，Ⅱ期11例の後腹膜リンパ節(骨盤内，大動脈)と大網における転移についても摘出材料で組織学的に精査した。〔成績〕開腹時診断Ia，Ib期10例中3例（30％）が，staging cytology陽性であった。これらの例はIc期に属すべきであり，しかもⅡ，Ⅲ期にも相当する不可視病巣の存在が示唆され，進行例同様の管理が必要といえた。なお，がん細胞の検出部位はダグラス窩，結腸外側および横隔膜下で，ともに10％であった。開腹時診断Ⅱa，Ⅱb期6例では，4例（67％）に骨盤外の腹膜面(上行と下行結腸外側および横隔膜下：3／6，4／6および3／6例）においてがん細胞が認められた。すなわち，Ⅱc期に属すべき例であるがⅢ期にも相当する不可視病巣の存在が示唆された。一方，組織学的精査では，Ia期における対側卵巣のがん潜伏頻度は3／29例（10％），またⅠ，Ⅱ期の後腹膜リンパ節および大網への転移率は，ともに1／10例(10％)であった。〔結論〕卵巣がんにおける不可視病巣の頻度は比較的高く，その検出にstaging cytologyは有用である。

260　針状腹腔鏡を用いた卵巣癌術後の定期的なfollow up

東海大
松浦俊一，篠塚孝男，小林善宗，宮本　壮，
村上　優，内村道隆，黒島義男，藤井明和

［目的］卵巣悪性腫瘍患者の術後follow upにおける2nd look，3rd look operationの有効性は証明されたが，それ以上の開腹術は現実的には困難である．そこで我々は，治療効果の判定と術後の定期的なfollow upに，手術侵襲が少なく，術後縫合の必要もなく，頻回に行える検査法として，直径3.4㎜の針状腹腔鏡を用いた検査を行い，その有効性について検討を加えた．［方法］腺癌を主とした卵巣悪性腫瘍患者29名に対し，術後定期的な腹腔鏡検査を合計54回行った．そのうちわけは，2nd look 24回，3rd look 18回，4th look 10回，5th look 2回である．腹腔鏡検査は，ダグラス窩，肝表面，横隔膜下を含めた腹腔内の観察と，腹水，骨盤底のtouch，腹腔内洗浄液の3種類の細胞診標本の採取と，異常所見のある部位からの組織標本の採取を行い，腹腔鏡所見，細胞診，組織診の3者より判定した．［成績］Ⅰ期15名での25回の検査で，疑陽性2，陽性1，Ⅱ期2名での7回の検査はすべて陰性，Ⅲ期9名の17回の検査では疑陽性3，陽性5，Ⅳ期2名と期別不明1名での5回の検査では4回が陽性と判定された．陽性例には化学療法又は手術＋化学療法の追加治療を行った．陽性群の中には腫瘍マーカー，CTその他の臨床データでは全く再発徴候をつかめないような小範囲に限局した病巣をもつ症例も多数発見された．［結論］卵巣悪性腫瘍患者に対する腹腔鏡を用いた定期的なfollow upは，手術侵襲が少なく，頻回に行うことができ，治療効果の判定や再発の早期発見に対し，その有効性が証明された．

NII-Electronic Library Service